

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 高久 翼 年齢 15歳 職業・学校名 失吹町立矢吹中学校

671

東日本大震災から4年経ち、私たちの町矢吹もまたじで地震が起こっていませんか。今によくな復興の様子が見てとれます。

しかし、震災が起った直後は、絶食しました。この余震災害に、みんなパニックでした。ガソリンスタンドには長蛇の列ができ、スーパーなどでは保存食を買いに来た人達が並んでいました。私の家では、水が止まっていたため、井戸水を使つたため、限りがあり、私が今までどれだけ水を無駄づかしていったかを実感しました。

私が避難した千葉にも、やはり多少の混乱がありました。水や米はスーパーには置いてない所が多く、あるても1人1つまでが普通りでした。

活動は良いでありますか、放射能の風評被害はまだ続いていると思います。私は、将来、矢吹町の役場の職員になつて、風評被害に負けず福島産の食品を精一杯アピールします。

匿名希望

今	の	福島	は	震災	時	に	か	や	る	も
今	や	す	で	す	。常	林	も	衆	い	か
今	や	も	復	興	して	い	な	い	地	域
今	た	ま	早く	復	日	じ	く	か	が	か
て	ま	す。	二	ス	が	じ	て	活	深	物
が	た	ま	あ	見	る	の	こ	き	い	の
ら	り	じ	は	し	い	こ	そ	を	を	し
今	後	、	庭	主	水	て	く	子	健	達
し	く	つ	環	境	を	で	き	も	た	た
2	ほ	い	て	里	、	ま	す	こ	こ	こ

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 星 和樹 年齢 16 歳 職業・学校名 大吹町立大吹中学校

私は3歳の時に小学4年の時に東日本大震災が起きました。	
震災が起きたとき私は小学校で卒業式の練習をしました。練習をしてるときは、体育館が振動したり、その中では大きく揺れました。みんなイスの下に頭を隠しました。	
振動が小さくなったら、またから体育館から校庭に逃りました。その日は雪も舞っていました。	
おんは親が迎えにくるまで外で寝てました。	
た。親が親が迎えに来てから帰ること、家には大きな被害はありませんでした。家の中では、食器が割れたり、テレビが落っこちました。私は地団の下に隠されました。私は住む地域は地震当日で被害は少なかったですが、海側では津波などの二次被害に会いました。被害は大きくなりましたが、行方不明者はまだいる可。私は一刻も早く人の人を見つけてほしく思います。それで復興も一刻も早く進めてください。	

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 山口 光輝 年齢 15歳 職業・学校名 東京師立矢吹中学校

もう6年の月日が経ちました。私達の生活																			
はもう震災前の状態に戻っています。原子力																			
発電も再稼働一本はじめました。しかし、一																			
部ごはまだ苦労している人がたくさんいます。																			
仮設住宅から離木たくても離木されなり人、																			
家も親族もなにもない人、そ木そ木が悩んで																			
生活を送っています。今のニュースを見てび																			
うびしよろ。一時期あんなに報道していた																			
にまるで飽きたかのように全く事実が飛ばさ																			
れていました。東日本大震災といふのは二エ																			
ースの話題ではなく事実なのです。この震災																			
で得た経験も知識も次に活用しなくてはなり																			
ません。ひず木来るびあろう首都直下型地震。																			
起きてからびは遅いのです。もう広く詳し																			
く情報を伝えるべきだ。私は思っています。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
 氏名 大木 錠奈 年齢 15 歳 職業・学校名 今吹中学校

3月11日に東日本大震災がおった。私は、
 この時、4年生がちょうど小学校の終業式が
 終わり家につひこから、10分ぐらいいた。たまたま
 最初に小さな余震が来た。それは速いペー
 スで大きくなり、並んでいらねばくがりす物
 がたくさん落ちて、ただ怖いとか頭にかかる
 た。小学校に避難すると小学校で遊んでいた
 子は青ざめながら涙を流していた。きっと自
 分も元な顔だ、ただろう。

この東日本大震災から4年、私が住んでい
 る所は、ほぼ復興したが、普通の方はまだ
 見たからない人もいる。今も、着々と復興し
 て、それが海に流されてしま、たとの中に、
 従遠に見つかることもあると思う。でも、
 見つかることあり、見つけたまへ。それに、
 今は休みがいい所でも、大震災を経験した人が
 生きている内に住めるようになれば、いいねば、
 いいと思う。どんな復興していい、ほしこ
 とみんな思ってないと私は思う。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐伯碧衣 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

震災の時、私は、まだ学校にいました。壁
が長い矢吹小学校は、校舎も古くて、倒れ
るのではないかと思いました。私は、平気な
通りをして泣いていた友人をなぐさめていた
けど、やつぱり怖くて、母が迎えに来てくた
て今日は、安心して泣きそうになりました。
家に帰ってみると、アパートが傾いていた
家の中も物が散乱していて、母と二人で落胆
へを覚えています。そこから今は祖父母の家に
お世話をしたりましたが、やはり、自分の家の
下へ下へ下へというショックは大きいものでした。
復興は早い進んでいますが、いまでは避
難生活を送っている人々もたくさんいます。
その人達のためにも政府や私たちは何か対策
をとらねたいといつたないと想います。自然災害
を事前に防ぐことは難しいので、私たち国民
が助け合う気持ちを持つことが一番の対策に
なるのではないかと感じます。私もその気持ち
を忘れずに生活していきたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 緑音 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

2011年3月11日、その時私は小学校四年生でした。すごく大きなゆれに襲われ、机の下に逃げこみ、ゆれがおさまるのをまでは私が逃げこんだ机で立ち、数人がかりで運ぶ先生の机を動かし、どこかでは窓が割れた。幼い私にとって、ではそれのすべてが恐怖の対象でした。その後も、寒空の下で11つまでも揃っていました。2週間ずっと祖母の家で泊まりここにいたりしてしまいました。

今でも震災前の生活に完全に戻っていました。ではあります。災害の影響はいたるところに出てきます。矢吹町は津波にもあっていませんし、原発事故も起こっていません。きっとこの町よりもひどいところなんてござんとあります。しかし、忘れないでほしい。目に見えて大きな被害がなくても、東日本大震災は大きな痕跡を残したこと。そして、それを少しすっかり超えて復興していること、そんな人々の前を向こうとする気持ちを温かい笑顔を私は知っています。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

私は、体育館で卒業式の練習を終えたばかりだった。教室へ戻ろうとした時、あの地震がやってきた。外へ避難した後も余震は続いた。当時の私は小学五年生。とても怖かった。さみしかった。次々に保護者が迎えに来るほか、親に会えないのがとても不思議だった。母に会えた時はとても安心した。家に帰ってからも余震は続いた怖がったのを覚えている。困ったことは、たくさんあったが、水が使えないのは、とても困った。水をもらいに行ったり、町内の温泉施設を利用して生活していた。この生活は大変だったが家族と一緒にいることがとても安心できた。

あの震災から5年がたった今、少しめぐらしく復興し、元の生活に戻ってきた。まだ復興が困難な地域もあるが、みんな仲協力して活動すれば、いつか復興がくると思う。あの震災は辛く悲しい出来事だったが、私の体験を忘れずに、希望を持ち前へ進んでいくことが大切だと思う。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
氏名 實方 花菜子 年齢 15 歳 職業・学校名 大吹町立大吹中学校

私が小学校年のとき、東日本大震災が起きました。余震がくる度に、恐くて、家から飛び出したりことを今でも覚えています。学校へ行けること、水や電気が十分にあることのありがたさに改めて気づきました。それと同時に、当たり前に思っていた生活がどれだけ幸せなことだったかということも気づきました。

現在、東日本大震災の被災地は完全に復興しているのでしょうか。未だに、避難先で生活している方や心に深い傷を抱えている方がいます。震災で壊れた建物を直し、避難してそのままが故郷で生活できるようになるにかけてなく、被災された方が、今の生活が楽しげと思えるようになることが復興だと思ひます。

当たり前の生活を取り戻したならば、そのありがたさを忘れずに、1日1日を大切にしていくべきだと思います。そして、福島県をはじめとして被災地に暮らす人々が笑顔で生活できるようになることを願っています。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

あの日、私はまだ小学生で帰りのバスに乗っていました。何度も地震の揺れに怯え、帰宅しても何回も何日も、夕食の時、入浴の時に寝ていても同時に地響きが聞こえたと同時に大きな揺れに家族が集まり、必死に抱き合ってじかみつきながら、小さ見る目で見守りました。そして更に原発が爆発し、益々不安な日々が続きました。もう福島には住めなくなの方と凶配しながらも二週間を群馬の高崎さんの家に避難した過ぎでした。少し落としていって福島に戻りましたが、周りでは水が出なくなり、食料もなくなり、電気も止がかり所もありました。私の家は大丈夫でしたが、何もない生活がどれ程大変なのかを知りました。今は普通の生活に戻りましたが、少しひの搖れの地震でも、あの時の事を思い出します。原発の問題もまだ解決しませんが、今後大企業、福島の人々が安心して暮らせるようにどうぞ来ぱい。考え方助け合いながら明るい未来になれるようになればと思いま。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 長尾 瑛紅 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

東日本大震災があり、下3月11日、私達は小学校4年生だ。下、棚の物が落ち、壇や建物の倒壊、余震も下くさん続いた。あれから5年。歳月を経て、今でも災害による苦しみは、少しずつ減り、しかし大勢いる。会津や中通りは、村や町にも活気が戻り、いつも通りに生活ができるようになって、しかし浜通りには放射能の被害により住めなくなってしまった。下場所が5年下たっても数多く在存する。また、津波による被害も大きかった。今だに行方不明者は100人を超えている。私は昔、波江町に住んでいた。友達は全員無事だ。下が思い出のたくさんつま。下あの場所はもうなくなってしまった。故郷が失われるというのはとても辛く悲しいことだ。原発の再起動が各地で始まっているが、二度とこんな事故を起こさないよう、考えてほしいと思う。そして一刻も早く福島県民全員が自分の住む町で笑顔になれることを心から祈っている。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 中島 里菜 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

私は、東日本大震災の時のことを今でも鮮明に覚えていきます。平成二十三年三月十一日いつも通りの学校生活を終えるためにいつも通りの帰りの学活を行っていました。その途中で少し揺れ始め、だんだんと大きくな、てきました。皆は防災訓練の時のように机の下に潜り込み、早く地震が収ま、てくれないかと思いつながら必死に耐えました。や、と、地震が小さくな、たので先生の指示で校庭に出ました。校舎を出ると地割れが起、ていて危険でした。その後、家族が迎えにきてくれて家に帰ると大好きな家の窓はグチャグチャで家の壁は剥がれたりしてしていました。私の家は全壊でした。近くに叔母さんの家があり、たため住むところはありませんでしたが、水が出ないためとても不便でした。震災によつて今まで普通にできていたことができなくなることがどれだけ大変なことかを痛感させられました。震災から5年経ち復興が進んでいたのですが笑顔が戻る福島になるよう願っています。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 齊藤 純一 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

613

東日本大震災のとき当時私は小学四年生でした。その時私は六年生の卒業式練習が終わり、帰りの準備をしていました。

初めの頃は「大きめの地震だったから」というにしか思っていませんでした。

しかし、避難訓練の時にいか聞いたことなかった放送がながれ、とても怖さきました。

それでもこういう体験をしたことがなかった自分たちちは机の中にいてもずっと騒いでいました。教室の中はカバンがおちたり教室に付いていたものが落ちたりしてとても怖かったです。

私はこのようなことからいつでも“恐怖”がきて、いつ“普段”的な生活ができないからわからない。こういうことをわかりました。

なので、それからは震災などを考え、できることは復興を早めらるよう協力しています。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 山本彩江 年齢 15 歳 職業・学校名 長吹町立長吹中学校

614

私は東日本大震災で多くの新しい体験をし
ました。昔から大きな地震は初めてでした。
これまでに大地震が当ったのは親や先生から
聞いていましたが、その時の私は軽々気持ちで
考えていた。いざ東日本大震災を体験して、
なにより怖く、つらく、悲しいものだと実感
しました。私の住んでいるのは中通り地方だ
ので津波の心配はありませぬでござる。
海側の地方はほとんど家も人も住んでないもの
を書き込んでしまいました。テレビでも津波は
おそろしいと思うのに実際に当った人々は、
言葉では言えないほど怖がったのが思ひ
ます。私はこの体験から人の大切さ、自分達
の住んでいる町の大切さなどもってたぐさん
の大切なものを学びました。その大切なものを
を守っていこうと思いました。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 渡邊 美聖 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災がおきたのは、私たちが小学校の教室で帰りの会を行っていたときでした。最初は小さなもので、校内放送で「つくえの下に隠れてください」と流れ、みんな隠っていました。隠れていました。私は、「じゅせん」を小さなものでおきました。」と思っていました。しかし、それはだんだんと大きくなってしまった。そして側のたなびきの上の物が落ちてきました。

小さなものがあさまり生徒は校庭にみなぎりました。その後も大きなものがきました。怖くて泣いている人もたくさんいました。家に帰ることなく、午後の朝まで1人以上の大人が見守りながら下校しました。たれものなどは見てありました。

家に着いたら、家はボロボロになっていました。家は住めなくなっていました。けれど、ペーパーたちは生きていって安心しました。もう二度と

いよいよおもしろい体験でした。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 松本 玲那 年齢 15歳 職業・学校名 広沢中学校

私は、東日本大震災を振り返り、徐々に前の環境に戻ってきていくのがあとを感じます。

初めは、このまま終わるてしまうのではないか不思議でした。しかし、日々重ねることには、前の環境に近づけたのも、国や県が働きかけてある人々のおかげだと私は思いました。

風評被害で、外で遊べない、たまごと比べて外で自由に遊べるようになりました。私は、陸上をしていて感じたことは、あたり前が生活がきて楽しくすごせるのは、その分働き

私たちが満足できるようにきれいにしてくれたおかげだと感じました。これから先、復興するのに時間とお金がかかります。少しずつみんなで支え合ひける福島県にしていき

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 室井 結衣 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

二〇一一年三月十一日、私たちが休学校四年生のときに大地震はやってきました。その日私は学校が早く終り当たる前に、私は友達を遊び車に付きました。家に帰って遊びに行く支度をし、荷物を持ちて学校へと行きました。私たちはその日たまたま学校で遊いましたといふ話になりました。大地震が起きたのも皆が学校に着いたちょうどどの瞬間だったのです。今思えば、僕は一一分でも集まるのが遅くなりました。立ち、立ち止まらず建物に囲まれています。危険歩道で大地震を経験していたのかと思うと、立っていません。吉島灘、遊び納乗をしてれば、私は今西川山の土壠の下に逃げました。今でも地震や津波の被害で苦しめています。気がつくといふと、胸が痛くなります。これから福島の未来を背負っていくのは私たち任せだという自覚を持ち、今、私たちが生きることを精一杯やっていきたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 岩松 瑞菜 年齢 14歳 職業・学校名 桧原町立太吹中学校

618

私は、東日本大震災で4年生で体験しました。その時私は、体育馆で卒業式の予行練習をしておりました。ちょうど教頭先生の携帯電話が「四〇四二」と鳴りました。数分後2時45分にはり、山梨県に体験した事がありましたが、搖れにありました。先生が「イスの下に頭をかくせ!!」と言われ最初はどうしてましたか、搖れがでよどんでいてくつろいでるのです。先生が「外に避難しました」と言われ、みんな走って、外に出ました。一尺の水は、全部外に出てきました。3月8日㈮の夜間に震が降りました。本当にびっくりしました。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 岩谷 順貞 年齢 15歳 職業・学校名 知波町立知波中学校

あたしは東日本大震災について考えて、こ
こもあります。

日本は、地震の日の事です。震災の時は、
に行っていて、勉強中でした。歩道がだん
だん大きくな、てへき、今までに体験したこ
この強い地震でした。すぐに祖父がおな
えに来てくま、荷物を轡たすに帰ることにな
りました。車の中のラジオでは、今起きてい
る事を放送していました。道路も一帯ごとく
には、としました。

家に帰ると、物が倒れていて、机の中まで
荒木っていました。仕事中の両親も、兄も祖父
母も全員無事でした。下りを見ると、津波で
てなくさんの人目をでくばつて、了事です
して一番驚いた事は、福島県の原子力発電所
が爆発した事です。

まだ未だ感じた事ですが、浪山高のまちか
今ほむい正徳殿、てもたと想ひます。自分の
家に帰れない人がひかれますか。今までより
七良、福島県にして、もう少しです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 遠藤 彩加 年齢 15 歳 職業・学校名 大吹町立大吹中学校

私は小学生四年生の時でした。三月十一日午後二時四十六分に大きな揺れがあり町を出ていました。私は元の時体育館で、卒業式の練習をしていました。突然大きな揺れに先生が大王が声で「川の下にもぐり行き。」と叫びました。大王が揺れやかまわり等で、一斉に外へ飛び出しました。そこで私が目にした光景は、電柱が倒れ、校舎がひび割れ、家の瓦が落ち、床の水があふれていきました。

父が迎えに来ました。家に帰ると家の家具が倒れていきました。片付けをしていると母が帰ってきました。母の働く施設が避難所となり家には父と私と妹の三人になりました。いつも大王が揺れがきっかけで命からほい状態で家族が一人でもいなくてはと、今不安は今までに経験したことない物でした。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 大西金 合 年齢 15 歳 職業・学校名 风吹中学校

私はまだ四年生でした。状況も分からぬまま搖れが止まるのをずっと待っていました。揺れが少しずつ弱まり先生方の指示で、校庭に逃げました。でも、校庭の近くにあったプールから大量の水が溢れ出ていました。色は恐怖が襲いかかりハニツク状態になりました。てしまいました。それから時間が立ち、また体育館に戻りました。家族の人が迎えに来るのを待っていました。地震発生から一時間頃に私の叔母が迎えに来てくれました。その時は、すごく嬉しくて嬉しくてたまらませんでした。まだ不安だった気持ちも安心への気持ちに変わりました。私は無事家に帰ることができました。みんなもけがなく大丈夫でした。

でも、今現在。東日本大震災から5年が経とうとしています。まだ家族が行方不明の人、住み家が無く仮設住宅に住んでいる人、放棄線關係で家に帰れれない人大きないます。完の生活とは言いません。まだ苦しんでいる人が実顔、希望を持てるようにしたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 金子穂風 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中学校

3月11日東日本大震災が起こった日、私はまだ小学校六年生でした。あの時けちよろん卒業式練習の最中で体育館にいました。確か6年生が式歌を歌うた席をそこから直後でしたと記憶します。最初は何が起きたのか、たくわかりませんでした。たたかきなり大きな音となり、その後大きな揺れが私たちを襲ったのです。天井からは軋まっていたホールや椅子などが落ちてきました。あの時の経験したことを忘れたことはありません。

私たち福島県民は地震だけではなく「原子力発電所」の問題や津波による被害をおおむねしました。原発の問題は今もなお続いています。私たちは県の復興を待ち、元の暮らしに戻れることを祈っています。また、今後も生活していくに思ひます。また、今後も生きていきたいくらいに生きよう折り続けます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 || 上 千尋 年齢 14歳 職業・学校名 || 上千尋

私は震災のとき小学校の体育館にいた。帰りの学活が早くに終わりそこには5人のクリスマスメイト。卒業式で演奏する「ありがとう」とう」の練習の準備をしていた。そして震災は起きた。そこから学校はしばらく休校にならず、寂しい日々が続いた。

新学期になり、ようやく学校は再開された。私の学校にも避難区域から越してき長人がいた。私の町にも避難してきた人がたくさんいた。町にたくさん建てられた仮設住宅。

私が所属していた吹奏楽クラブはすぐ近くボランティア演奏に行ってきた。三人目に大変好んで演奏を聴いてくれた。友人口に感謝せずにはいられないの私は自分で自分の身、逆に涙しながら感謝されました。私たちが複雑な気持ちを抱えてからあの「ありがとう」という演奏でした。

私は卒業吹奏楽を統計をみると、この震災で人口を傷つけてしましました。私は又また癒すために、「ありがとう」というを来て統計下さい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小針 遥 年齢 15歳 職業・学校名 矢吹中。

「東日本大震災を体験して、

私は今まで、あまり地震のことを意識していなかったし、怖いとも思っていませんでした。しかし、東日本大震災が起きたとき、とてもなく大きな不安と恐怖におそれました。

その後、ニュースを見た時に私は思わず、「え？」と言ってしまいました。家がくずれたり、地面にすごいびびり入ってたり、現実に起こっていることにいたとと思うのに時間がかかりました。さらに、やっと受け入れたて思つた。今次は原発事故、そして津波。とてもショックを受けました。福島が轟撃された時もショックでした。どうして原発事故が起きただけで嫌がられ方主やいけないのかと思いました。

私は最近地震を意識するようになります。

これからはいつも地震が怖っても良いように意識していきたいし、もっとたくさんの人へ福島に来てもらいたいと思います。そして福島は大丈夫だ。と思ってもらいたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小針 茗 年齢 15 歳 職業・学校名 次吹中学校

2011年3月11日私は、学校の体育館で卒業式の練習をしました。私は体育館で友人は大きな地震を初めて体験しました。皆が椅子の下やとの場で頭を抑えながら揺れがおさまると必死でした。その時の事は、家に倒れたお玉で3人の命が奪われたのが怖い、たとしか覚えていません。家に帰ったら中はごちゃごちゃになっていました。																			
私と姉は近所の子たちと震難が怖くなりましたが、弟妹たちは田んぼの道で散歩をしました。それから私は、東京に避難したりしたのが怖いと思ふ事はなくなりました。																			
今、震災前から11に住せるのは、他県や外国からの助けや、原子力発電所で一生懸命働く人たちの人達がいるからだと思います。助が、命を大切にしたいくと思ひます。そして大人には、たまに震災をしないとい子供にはちゃんと教えるのがいいの子に知りてほしです。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 田澤 琴菜 年齢 15 歳 職業・学校名 矢吹中学校

わたしは、震災が起きたとき、小学四年生でした。そのときは、卒業式の練習をしていました。初めのうちは、何が起こっているのかなんて全く分かりませんでしたが、テレビで津波などの災害をみて、とても怖くなったり、自然災害は恐ろしいものだと思いました。また、わたしはいゆき市に住む友達がいて、みんなは大丈夫なのだろうかと思い、手紙を送りましたが、友達はみんな元気そうだということが受け取った手紙から感じ取れました。でも、な分には友達を失ってしまった人もいるということは、わたしも胸を痛めました。自然災害はわたしたちで止めるることはできないけれども、この震災を通して学んだことを福島県が責任を持って「復興」という新たな道に立ち、これからも活動をしてほしいと思いました。そして、震災があったなんて忘れるくらいの福島県になればいいなと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 渡部 真衣 年齢 13 歳 職業・学校名 次吹

627

私は、二年生の時に東日本大震災にありました。その時、何度も「さよなら」と言っていた時におきました。何がどうなって、何とか分かりなくなりました。ぼう然としていたそのときです。上から本ほせが頭にあたりました。痛か、たけり、忙いで机の中にもぐりました。泣き声の時はもうすでに大泣きしていました。思い出す。そして先生に抱かれて急いで外へ出ました。外の光景がて、恐怖で止まってしまいました。それには、祖母のことです。祖母はお店を開いていて、でもその家は昔からの家だ、なのでボロボロでした。だからこそ心配でした。夜になりまだ予震が続っていました。あの時はとても怖わが、です。

あの街から4年が経ちました。今でもあの日のことは忘れません。そして、今は平和な生活をおくっています。とても幸せです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
氏名 田中裕介 年齢 14 歳 職業・学校名

矢吹中学校

東日本大震災が起きたとき、僕は、小学三年生でした。普通の日の金曜日にやつせん大規模な地震が起きました。そのゆえはとても激しく、とても長いものでした。世界が壊木始めたのかと思いました。まだグラスが割れ、時計や物が落ちてきました。ウチが木でましたと、外へ逃げました。外に出ると、泣いていた人、おどろいていた人と、たくさんいました。僕は、おどろいていたほうでした。隣では、2人の親が死く、2人の女の無事をしました。泣き止み、よしとしたり、泣いていた人もいました。

僕は、ど本だけ、自分たちが大切に育てて来たものを分かりました。家に帰ると、僕の家は、皆大きくなっている。大きな箱からくつが飛び出てて、台所は、たばからぬれとが落ちてて入らないようになりました。でもうらか、おじいちゃんが倒してました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 田中 真樹 年齢 14 歳 職業・学校名 矢吹中学校

ぼくが紹介したい東日本大震災の体験は、とても地震はおぞろしいと感じたことでした。なぜなら、小学校3年生のぼくにはとても印象に残ってしまったからです。

東日本大震災の日、ぼく達はいつも通りの日を送り、一日を終えようとしていました。その時、ぼく達は帰りの用意をして、帰りの会をしにラシしてきました。その時です、「ト、ド、ド、ド」という音がしました。何なのだ？と、当時小学三年生で何も知らないぼく達は思いました。すると、急にゆれはじめ、徐々にゆれば大きくなっていました。そして、言われるがままに避難しました。そして、夏ると、ここには今までの姿はなく、すごく荒れはてていました。その事がぼくの頭からまだにはれません。だから、こんな思いはもうしたくならない思い、今までよりずっと復興への思いを強くしたいと思いました。

東日本大震災がこの町に与えた影響は大きかった。町内ほとんでは崩木落ち、道路は木末でいっぱい、とても町としては見えない位だった。その日から一週間は集会所で過した。																			
その一週間の間に、家の片付けなどをしてしまったが、それほどの落木が、外壁はほとんどはが木落ち、屋根は庭に崩木落ちていた。																			
親世帯の手伝いも抜かず、一週間で終わったのは、不幸中の幸いだ、たと思う。																			
今では住める用にはなったが、不便な部分も多い。シャワーが使えないなど、一階の部屋に電気が通らなくなったりと、生活面で不便な点が多くなった。																			
今後、繰り返してりたが、家をリフォーム、または新しく建てるという話らしい。その時が楽しみだ。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小林奈緒 年齢 14歳 職業・学校名 失歎中

私は東日本大震災の時、園子にかかりました																			
子供たちが我が家へ帰れなくなってしまったからです。恐怖で震えました。震度は7度でした。																			
私が隠れ神社へ校庭へ逃げました。校庭には大きな木がありましたが、家へ戻る人が多くて怖かったです。																			
お母さんも無事なのか、家の倒れても心配になりました。お母さんも家へ戻る																			
時、お母さんは涙を落しました。家の中は灰で覆われていました。																			
やがて、大切なものや家具が壊れていました。お母さんも泣きました。																			
今、心が痛みます。お母さんも、テレビを見つめながら、涙を落す。お母さん																			
道1711、見つめながら涙を落す。お母さん																			
、5年後もまだ元気な人間にならなければなりません。自分自身が何を																			
手伝えるかを考えながら、お母さんと一緒に活動する																			
復興へ向けて頑張ります。お母さんも元気になります。																			
元気になります。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 金子 佳恵 年齢 14歳 職業・学校名 宇吹中学校

僕はあの時クラスで帰りの会をしていました。
帰ろうとしたときいきなりぐらっときました。
そこは避難区域に住んでいたので、ひつ
にきました。そのときは身ぶらで、特に必要
な物だけ持ってきていた感じでした。ひとこやお
じさんに会えたので、当時小さかったしうれ
しく思っていました。でもすぐ大変なこと
なんだっていうことが分かったのは小学校6年
ぐらいの時でした。夜、一緒に泊まっていた
しました。寝てみるとひといきなり泣き
はじめました。「どうしたの？」と聞いてみ
たら「家に帰りたい…。」と言っていました。
その日はひとこのおじいちゃんの命日でした。
こんなに小さい子がこんなになるなんてと思
うと心が悲しくなり、らく苦しい気持ちにな
りました。このことから、僕はできるだけ
早く復興してほしいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
氏名 えひゆうだい　年齢 14歳　職業・学校名 宇吹中学校

僕は中学生で、毎日通学がおらず、
5年前といふと小学校三年生の三月だった。
ぼくは学校にハセ。帰りの合せでここに。
外へ出た席について、ばらばらにほんかく。
それが何に由りの笑いだした。ひまんくんも
元通りに外へ出後ろに並び、校舎ににげ
子こどもを走るのである。みんな家の方へ向
け江に向った。僕も家へがんばるが
、母はデベサーでバスでおじいちゃんが
防ぬぐ人の安全確保、父は会社の部下だった
。の引率で学校に来ることばかりだった。2
の日は宇吹中学校を出発した。父と母に会
うたのは夜8時ごろだったことも覚えた。
このよさな体験を僕はしました。今は震災の
記憶を忘れかけます。でも忘れられない
せいかと見えます。福島はこれから原発問題に
立ちおかなければいけないと思います。
また復興と人々の心のケアの方が
大事だと思います。あの震災で福島の子どもたち
を楽しむようにします。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 潮地佑 年齢 14歳 職業・学校名 夕次中学校

私が東日本大震災を経験したのは小学校3年生のときでした。その時は、帰りの会の最中で、席に座っていました。すると危い気がゆれ動き、ガタガタと音をなり出しました。あわてて私は机の下に身を守りました。なぜかのことで仰くつりましたが、校庭は火事なし、家族がおかえり来るのを待ちました。家に帰ると中は物がぼらぼらに散乱していました。ようやく片づいて、テレビをつけようとニュースで津波で何千人の人が行方不明で大変なことをしました。また原子力発電所の事故についてもおどろきしかありませんでした。現在は、かなり復興し福島も活気を取り戻しつつありますから原発のせいで自分の住んでいた所に帰れない人がたくさんいるはずです。私は被災少女の場所を手伝うので、そういう人達の心情は分かりませんが、帰れない、津波で大切な人を失った人達の気持ちを考えると心が苦しくなります。だから積極的に復興ボランティアなどに参加したいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
氏名 小湊 優花 年齢 14 歳 職業・学校名 広吹中学校

三月十一日、午後二時四十六分。あの時私たちは学校で帰りの会の最中でした。担任の先生が携帯の地震速報を見て、「地震がくるかもしねない。」と言った直後に地震がきました。机の下に入り、少しゆれがおさまった所で放送が流れました。「全員、校庭に逃げなさい。」その言葉を聞き、避難訓練を思い出しながらみんなで必死に校庭へ避難しました。私の住んでいる町には海がありませんが、海がある町では津波がきてしました。そして、たくさんの人人が亡くなってしまいました。

私はこの経験を後世に伝えていく事が大切だと思います。そして普段から避難訓練等を通して、地震が起きた時の対処法を知つておく事も、とても大事だと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐久間 前代元年 年齢 16歳 職業・学校名 実习生中

僕が東日本大震災を体験したのは、小学校四年生の時でした。地震が起きた時、僕は、木一ムル一ムの時間でした。先生の指示で、机の下にモーリ、地震が治まるのをまち、上書きのまま、ラントセルは持たずには校庭へ逃げました。その後、祖父が学校へ迎えに来されました。祖父の家では、食器棚が倒れ、ガラスが粉々になっていました。看護師をしている父の葬場の建物が壊れ、患者さんの杖など、父は、数日帰ってこれず、僕は祖父の家へ遊びました。矢吹町では、水道が壊れ、水が出なくなったりため、僕は祖父と湯水町へ行きました。あれから四年が立ち、電気や水道、ガスが元通り使之るようになり、冬でも暖かく過すことができます。これからは、このような大きな地震が起きても電気や水道、ガスなどが、止まらない声うな設備にすること、良いと思いました。また、これらのがまられた資源を大切に使っていかなければならないと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

地震は小3の『帰りの会』の途中に起きました。初めはすぐに止まると思って机の下にちぐりました。しかし、窓ガラスが割れ破片が落ちてきました。先生の指示に従って避難しましたとき、校舎にビビが入る者が聞こえてとても怖かかったです。先生と校庭に居たと祖父が迎えに来てくれました。帰り道では塀が割れ落ちたり傾いた家があり、自分の家が心配でした。家の中は戸がはずれ、冷蔵庫が傾き自分の部屋も、本等が床一面に落ち入れました。

んでした。

次の日から四年生の新学期が始まるまでの約一ヶ月間、祖父と兄と三人で埼玉の新せきの家に避難していました。両親と離れて寂しかったです。二度とあんな思いはしたくないです。

地震の後、家の周りは空地が多く寂しくなりましたが、最近は新しい家がたくさん建つてきました。皆で仲良く楽しく暮らせたら嬉しいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 トヨモリ ジュ

年齢 14 歳 職業・学校名 先駆中学校

私この体験談は、震後のいじめや地元や子どもたちも含めて大人たる二度や三度の経験をもつて、その中で本心から人間らしいものを見出したり落ちこぼされたりして、かえり来ることになりまへせ。ほんとは、おじいちゃんの車で行きましょ。まことに気が入るのよ、さうかばはゆか、誰の車かおじいちゃんをうちから離すか少し、窓の外へ出た人たちと一緒に車を乗せてもらひしときがふが、左の車両でございまへせ。オレドリーレビットも、これにて機会もあつたから、おか子やの両親をもう一度見ておきたいが、元です。お母さんは、立派の社会人で、立派なお母さんでした。お父さんは、立派な立派な男でした。おじいちゃんは、立派な立派な男でした。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 並木 千空 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

僕は当時千葉県に居ました。学校の校庭へ出るや、家族の心配をして、泣き出している人ばかりまだこの時、東北地方の事など頭にありませんでした。家に帰ると棚から物が落ち皿やコップが割れ空気が重く感じました。テレビをつけるとどのチャンネルもつけても地震のことばかり。たりした事ないのに。。。最初は奇人な事しか思ひませんでした。しかしじんじん東北の現状を知つて、早くうちに自分より困っている人や、亡くなつてた方が沢山いる事がわかりました。

これから復興へ向けて今自分がなにをするか復興につながるのか、いろいろ考えてます。節水や節電として一番は亡くなつた方の今まで精一杯生きることだと思ひます。まだ生きてる人がたくさんいます。多くの人たちに声かけ希望を持たせてあげてほしい人がいて、とても感動しました。多くの人たちにはなれないかもしれないけど小さな轟から頑張っていきたいと思ひます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎勇気 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

3月11日のあの日、僕の学校が早く終り、
たので、児童クラブの友達と一緒に遊びました。
サッカーをして楽しく遊んでいたその時、児
童クラブの先生の携帯が「ザーーー」と鳴り
始めました。その当時は緊急地震速報だとは
知らなかっただので、「なんださう?」と思うだ
けでした。すると、いきなりゴゴゴ…と地鳴
りがしたと思うとこととても激しい揺れが襲,
てきました。僕も含めそこにいた友達や他の
児童がパニックになり、揺れて立ってからお
なくなり座り込みました。学校の校庭には瓦
びが入り、近の家の瓦が崩れ落ちました。揺
れが収まり急いで家に帰ると食器棚が倒れ茶
碗が割れていきました。情報を入手しようと
VTCしようと津波が海沿川の町を襲、ていう
映像が流れていきました。

僕はあの日のことを鮮明に覚えていります。
そしてこの震災を経験して今思ふことは命の大
切さです。今までもそしてこれからも他人
や自分の命を大切にしていきたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎修永 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

僕が東日本大震災を経験したのは、小学校3年生の3月でした。

震災の起きた日は既に学校から帰って、家にいました。家には母と僕しかなく、2人でテレビを見ていたところでした。画面の右下には「緊急地震速報」と書かれた四角い枠が表示され、スピーカーからは地震を警告するサイレンが流れました。すると、今まで体験したことのない揺れがきました。僕と母は慌ててこしむり、外へ飛び出してしまいました。

電柱のケーブルは上下に大きく揺れ、家中からはがちゃんがちゃんと、何かが落ちる音がしました。

揺れが収まり、家の中に戻ると、本棚の上の方から本が落ちて、壁には亀裂が入り、食器棚からは血が落ち割れました。

この震災は、様々なところに被害をもたらしました。震災での経験はこれからも、と先に感じていかなければいけないと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙
氏名 野村俊介 年齢 14歳 職業・学校名 次吹中学校

僕は、五年生のときに、東日本大震災にありました。そのとき、僕は偶然、風邪でいいてしまい学校を休んでいました。家でテレビをみながらゆっくり休んでいたが急に音が鳴り、恐怖で心地よいとしてすぐに揺れて危険を感じてすぐこたつの中に入りました。10秒くらい長い揺れにたえて揺れがあさまったと思い。こたつの中から出ました。しばらくすると近くに住んでいた祖父と祖母が家に来ました。そのときの祖父母の家は物が多く、棚の中にある、たぶん落してきてとても危険な状態でした。祖父母が来てくればすぐに心強かったのです。親が帰ってきてくれるまで、こいつらはいてくれました。3年住たつのでこのことはすごくうれしかったです。

この東日本大震災で、大切なことを学びました。このことと忘れないようにしたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 畠永 美音 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

平成二十三年三月十一日午後三時四十六分

私がまだ小学校三年生で、学校で遊んでいると
その日この時間にみんなの記憶に残る出来事
がおこりました。東日本大震災です。私は、
あの日学校で友達と一緒に遊びました。すると
地面がぐらぐらゆれて最初は、小さく、たの
で「なんだ地震か」とかるい気持ちでした。
ですが、どんどん大きくなって歩けないぐら
いぐらぐらゆれました。友達しがたまて、
すわりました。長くゆれた後、みんなはすぐ
に家に帰りました。すると私の家はかわら
が下に落ちたり家の中の物は床から下に落
ちたりこわんたりして入れませんでした。幸
運では、津波や家の下りきになつたりな
どでたくさんの人々が亡くなりました。東日本
大震災から四年くらいがたちました。また、
たくさんの人々が見つかりません。放射能の
えいきょうでまだ入れない町もあります。ま
たくもほやく、放射能がなくしてほしいで
す。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 内山悠梨 年齢 13歳 職業・学校名 広沢中学校

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分に、東日本大震災が起きました。

その時の内では、非常に強く小学校の何年何組のかんばんかおちまた、木は木もとあつたところからはなれもりしていました。

小学校の校庭にいくまんに、教頭先生が、学校にいるみんなは安全かどうか、必死に放送をしてくれました。

みんなが校庭に逃げてたくさんの人々が、泣いていました。

また、家に帰ると朝まできれいだった部屋がお四など、コップ、電子レンジ、トースターなどがおちつかえなくなりました。下の使つていい部屋の壁がひびわれができていたり階段の壁など、床などがひびきられてしましました。

さっきまできれいだった家がとても違う風景になってしまってもこわかったです。

でも町の人かがんばってきれいにしてきたのが大切にしていきたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎陽菜 年齢 13歳 職業・学校名 学生・矢吹中

私が東日本大震災にあったのは、小学3年生のときです。帰りの学活を行って、帰ろうとしたとたんに、地震が起き皆とまどっていました。全員が机の下にもぐり、揺れに耐え外へひなんすると、皆が泣き崩してしまいました。私ともう一人が皆をなぐさめました。寒いと言っている子にうぬぎを貸してあげたり、マフラーをまいてあげたりと、とても苦戦しました。皆が泣くから私も泣いてしまいました。自分の家族は大丈夫かなどとかいろいろな事を考えて、泣いて、とても疲れました。

今ではとても平和な生活を送っています。ただ、被災した地域に住んでいた人が自分達の住んでいた場所に戻れていないのがかわいそうに思えます。

この地震は一生に一回体験することもできないような地震です。それを体験した1人として、将来こんな事もあったね、と言えるようになります。忘れないようにしたいです。また、この事を次の世代に知らせたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 竹内彩 年齢 14 歳 職業・学校名 大吹中学校

646.

私は東日本大震災が起きた當時小学五年生でした。あれから五年中二年生となり、たな木海岸で震災を見て深く考える事が多くなりました。津波で多くの命が奪われ、原発事故で震え山が自らの家に来ました。たん木は決山川の中で私は何ができるんだろうと思いまして。私は毎日一生懸命生きること、うれしい、悲しい、悔しい、幸せという気持ちになることを大切にすること。そして、仲間家族がいるということを大切にすること。

私はこれ以上に悲しいことがありましたか今は真っ直ぐ前を向いて人生を歩んで行きたいと思います。そして命日が終わること明日が来るここに感謝しながら楽しい日々を過ごしていきたいと思います。

これからはどんなに誰に負けても負けない。でも自分らしく生きたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 横田 树里 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

私が5年前の3年生の時に東日本大震災が																			
終りました。その時は学校が早く、家はいい感じ																			
ので、起きた時にはとても元気になりました。																			
初めて地震の大きさをしました。体験して																			
でもこの地震で多くの人が津波などで亡くなっ																			
ました。とても悲しいことだと思います。																			
私が体験したことばかりではなく体験するこ																			
とはつきないことをほんの少し、物語で終わらせて																			
いよう、次の世代に続けていきたいなと思																			
◆まし、そして、少しでも福島の人々にう																			
に役に立つように、これからも頑張るよ、																			
いきなうと思いまして。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 斎藤 葉美里 年齢 14歳 職業・学校名 天吹中学校

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分に、千年に一度の大震災が起きました。その時の私は小学3年生で、かわらをひいていたのでベッドで寝ていました。すると、急に激しい揺れがおきてきて、びっくりしてあわてて起きると、お母さんが寝ていた弟をたたいて階へ下りていいくところでした。一階へ行くと、もう一人の弟がテーブルの下でピクピクしていました。お母さんはすぐにテレビをつけたニュースを見ました。家の中には、食器が割れて危ないので、外へ避難しました。そこでいとこ達と、地震って何で起こるんだ?うとか、はなまし合ったりしてました。

また小さかった私達にとってそれは恐怖でした。私達の家は大丈夫だったけど、家が壊れたり津波で流されたり、家族や友達を失ったりと、大変な人もいました。その時CMでやっていた「I LOVE 福島」が心の支えでした。震災のこと忘れずにそれを乗り越えることが復興への第一歩だと思します。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 渡邊 那奈 年齢 14歳 職業・学校名 矢吹中学校

5年前の3月11日。あの日、もたしたちは小学4年生で校舎の3階に居ました。地震が起ころうなど予想もしていなかつたので、いきなりの大きな揺れに戸惑い、混乱しました。

その後、無事に家族と再会できましたが、いざこのお父さんだけ行方が分からぬままでした。サーフィンに行、たまたま津波に巻き込まれたといふことでした。でも、無事に泳いで生き延びました。でも、福島県には亡くなった吉や今だに行方不明の方、原子力発電所の爆発で放射線によって避難して居る方も沢山います。それに加えて、避難住居先では年数のけい約によつて出て行かないといけない。たり、新居が出来あがつてしまつた話しききました。心に傷を負、た被災者が追い出されるような事は余計に大きな負担を加えてしまつてゐるのではないかと思ひます。まだお年寄の方にもう少し周りの方と交流する事業をつくるといふと考えます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 大和田 仁里 年齢 13歳 職業・学校名 伏吹中学校

私は平成28年3月11日に、東日本大震災が起きた時に、学校がすでに終め、7時7分で勉強をしていました。塾には先生などの大人がいたので冷静に先生達の指示を聞いたら机の下に隠れました。親が迎えにきてくれるまで外で待つ7時8分でした。家に戻り、7時8分と途中、道路が割れ7時9分通りに通らなくなってしまった。また、他の家の瓦がおち7時10分帰るまでの道のりも大変でした。家の 中は床が床えながら、物が落ち7時11分付けをするのにとても大変でした。食べ物などを買へにセガンドに行きましたが、人がたくさん並んでいて、余震もあるので5人まで入る=8時10分でまなか。下のが記憶にあります。

東日本大震災は怖い思い出しかありません。次に大きな地震がきたときにはすぐ対応できるように準備しておきたいです。